あさひ

100号記念特集

百号刊行に際して

あさひ編集委員長　九里道守

はじめに

広報「あさひ」もこの十二月をもって、百号を町民のみなさんにお届けするはこびとなりました。百という数字は一という数字の積み重ねであることはいうまでもありません。しかし、その一号、一号が町の記録であり、町の歴史を綴りなすものであり、そして町の発展の経緯を、姿を浮き彫りにするものでありひいては明日への歩みの指針ともなるものであることを考えるとき、その一号、一号に編集者の人知れぬ苦心が払われているのです。

創刊の思い出

昭和二十九年八月、一町七ヵ村の町村合併がはたされ、朝日町が誕生、力強く新町発展への新しいスタートをきった。寄り合い世帯の、ともすればバラバラになりがちな町民を結合させるきづなとして、翌三十年六月、町広報「あさひ」が発刊され、朝日町全世帯に配布されることになった。

創刊号編集準備会には、教育委員会、総務課、各公民館長が集って「あさひ」の性格について話し合い、結論として、町広報と公民館報の性格とを併せもったものとすることを目途として編集することになり、初代編集長に私が互選され、八ページ大の創刊号が全世帯に配布された。そして八月には朝日町発足一周年記念として第二号を発行し、十一月の第三号以来月刊として毎月発行するまでにこぎつけたのである。しかし編集委員会は構成されてはいるが、なかなか記事が集らず、誌面を埋めるのに一苦労も二苦労もあった。おまけに編集の不なれもあって、読者や先輩からいろいろと注意やらお叱りを受けることもたびたびであった。誌面を満たし、またおもしろい読物として町民に親しまれるものにしたいというので、郷土の史蹟、名勝めぐりを一号から二十号まで続けて、心ある読書層に共鳴を得、親しまれるようになった。

また、この「あさひ」を故郷を離れて全国各地に活躍されている方々へも送って、音信連絡に代えることとして、今日まで発送を続けている。

100号の足あとを振り返って

町村合併の実現を見たあと、総合的な町広報を発行することになり、一応の編集委員の陣容を整えたが、最初の障害は記事の集まらないことであった。役場の記事のみに依存すると、数字の羅列になる可能性もあるし、さればといって日刊新聞や文芸雑誌の亜流でも困る。

そこで役場内各課の記事を中心として、青年団、婦人会、教育、文化、交通防犯、農事、郵政その他一般と、凡そ町民の必要なすべての面を網羅することに決定した。

もっとも予算のわく内で最上の編集を企画せねばならず、当初は隔月刊と腹を決め三十年六月にその第一号を世に送った

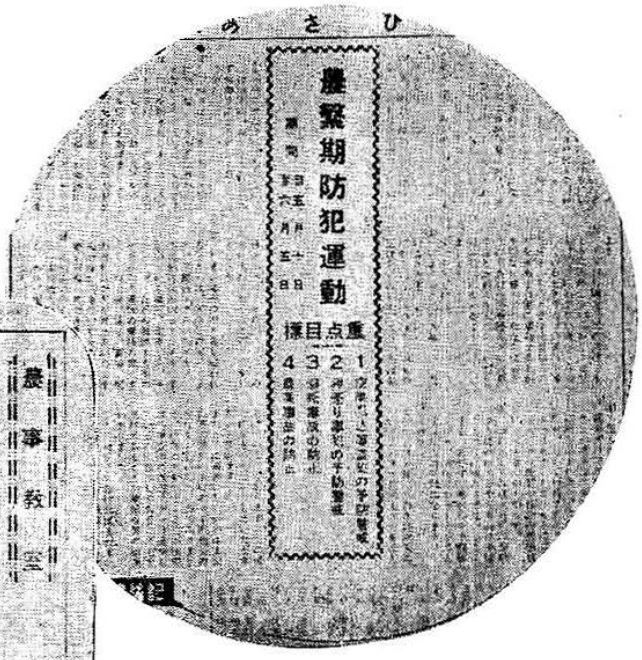
題名は町名の朝日を採って単純に「あさひ」と命名し、題字は大平山濤氏の手を煩わした。予算の関係で写真やトッパンを減らしたり、紙質をおとしたりしたこともあったが、第二号は町政一周年記念号として増頁を断行し、途中数回に亘り六頁建てにしたこともあったが、大体B4判二つ折りの四頁建てにした。

なお本誌の回顧については次の数葉の写真によって町民の皆さまとともに往時を偲び将来の編集の参考に資したい。

創刊号の表紙裏（第二面）ありしHの金森町長及び元教育委員長の山田蕃氏、現町議の清水伝平氏らの若々しい顔が紙面に出ていてまことに今昔の感が深い。

朝日連青の記事は第二号から続けられ、町内の青年団活動の模様がくわしく報ぜられてきている。

婦人団体の活動も第二号から登載され、当時の活動ぶりを偲ぶことができる

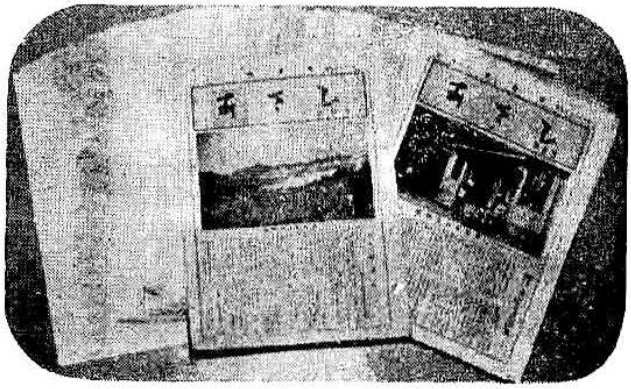


不良化防止や防犯記事については警察当局から直接記事が送られ、最近では交通その他消防署関係の記事と共に広報の重要な部面を占めている

農事教室は第八号から本格的に登載され、朝日町農業センターの担当として町内農家の期待は大きい。

第12号から特集として町内の史蹟名勝が紹介され、好評を博したこともすでに久しい。担当は現編集委員長の九里氏であった。

郷土写真風物詩は町内観光地の紹介も兼ねて好評であった。写真はいずれも町内のアマチュア写真家のケッ作揃いであったことも記憶に新しい。



広報あさひの1号から99号までの集冊

長寿番付は15号から企画され、途中割愛されたこともあったが、年中行事の敬老会と共にほおえましい記事の一つといえよう。

郷土の史蹟名勝めぐりの後をうけて、郷土の伝説めぐりを企画し25号から大菅達二氏が担当執筆、大方の期待と好評を得たが、未開拓の分野が多く、相当困難な仕事であった。

以上の外過去における特集記事としてあげられるものに成人者の紹介、議員団のプロフィル、民生課担当の家庭医学教室等現在なお続いているものも相当あるが、将来さらに新しい感覚で町民に期待される企画を編集全般に採り入れていく必要があろう。　（Z記）

100号発刊によせて

よく役目を果たしてくれた「あさひ」

朝日町長　本村本松

広報「あさひ」が百号を刊行することになりました。

歳月にして八年七ヵ月を経過することになります。

過ぎたあとをふり返ってみれば、実に早いものだが、本当に長い年月朝日町の広報機関としての役目を果たしてくれたものだと思いこれまでに育ててくださった編集委員の方々に、その努力に対して敬意を表するとともに、労苦をひしひしと身に感じ、感謝申しあげる次第であります。

泊町外七ヵ村が合併して、世帯も大きな朝日町になると、すぐ広報「あさひ」の発刊が計画されて第一号が刊行されていますが、号を重ねるにつれて内容も整備されて、朝日町の広報としての役目を十分果たしてくれているので喜んでいます。

町外でも、町出身の人たちからは特に郷土からの唯一のたよりとして喜ばれていますので、朝日町の郷土出身の皆さんとの連絡機関にも利用させていただいています。

本号で百号を迎えたわけのこの広報「あさひ」が朝日町と生命をともにして、朝日町の存続する限り続刊されてゆきますので、なにとぞ広報「あさひ」を可愛がって皆さんの手で育成していただき、よりよい広報として生長させてくださいますようお願いいたします。

「あさひ」は町発展の歴史書

朝日町教育委員長　西田彦衛

広報「あさひ」、その過去からの流れをふりかえってみますと、昔の町の姿を紹介する形から始まって、現実の町政を主体に報道する「あさひ」にと極めて順調な進展を見せている。

最近の報道は特に、その年度の重要記事を選ぶに誤りなく、しかもその月の前後の重点問題を忘れぬ適切さをもって読ませてくれている。その記事はためになり、楽しみなものになっている、待たれる広報「あさひ」として成長してきている。

関係の委員方の慎重にして真摯な心構えに対し、深く敬意を表しあげるものです。

百回の「あさひ」が町の発展の跡を残す貴重な資料であり、学校の教材でもあることを喜ぶものである。紙面の関係から、掲載される記事が制限されるので、記事の選択にずいぶん頭を悩まされるようすである。重要記事がもれぬよう増頁したいものだ。

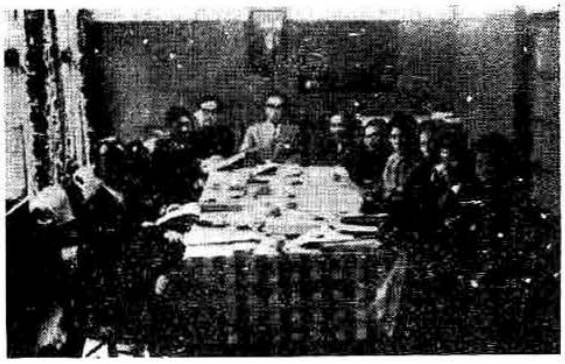
第九九号に平坂芳文さんのことがその第一頁を飾ったことは、霜枯のうすら寒い季に、心温まる嬉しいことの一つである。

増頁によって地区外の方々が、かってのまた現在の大きなご活躍の模様を報道できるといいと思う。

また広く町民の善意から湧きあがった与論をのせることのできる日のくることを期待するものである。

編集委員紹介

委員長　九里道守（学識経験者）担当　社会教育
委員　大菅達二（公民館代表）担当　公民館関係
〃　間部善治（学識経験者）担当　文化関係
〃　森　群平（学校長会代表）担当　学校教育
〃　扇谷光夫（体育協会代表）担当　社会体育
〃　水野すな（婦人会代表）担当　婦人会関係
〃　水野正史（青年団代表）担当　青年団関係
〃　中陳孝正（農業改良普及所）担当　農業改良
〃　野村久四（教育委員会）担当　社会教育全般
〃　山本重義（議会事務局）担当　議会関係
〃　舟本伊次郎（朝日町産業課）担当　産業、農業改良
〃　住吉　寛（朝日町建設課）担当　建設全般
〃　鍛治常二（朝日町総務課）担当　総務全般
〃　水島牧雄（朝日町民生課）担当　民生全般
〃　前川俊男（朝日町税務課）担当　税務全般
編集担当　折谷　要（教育委員会）



100号までの功労者

昭和三十年六月、新生朝日町が広報の第一号として「あさひ」創刊号発行、第三号以来毎月欠刊もなく、ここに百号の発刊をみるに至りました。

しかしながらその蔭には、数々の苦心と努力がはらわれております。

その中にあって終始一貫、毎月原稿の編集に、内容の改善に、なみなみならぬ努力を重ねてこられた次の三氏を、百号記念を機に読者に紹介し、感謝するとともに、その功労をたたえたいものであります。

九里道守氏

昭和三十年六月創刊号より十九号まで編集委員長、二十号より九十五号まで編集委員、九十六号より再び編集委員長。

大菅達二氏

昭和三十年六月創刊号より編集委員となり、二十号より六十九号まで編集委員長、その後引続き編集委員となり現在に至っている。

間部善治氏

昭和三十年六月創刊号より百号に至るまで八年六ヵ月の長きにわたり編集委員として、常に定期発行と内容の改良充実に努力された。

編集兼発行　朝日町役場
印刷所　両越印刷
送料　六円
定価　六円

魚津繁次氏ら二氏に記念品贈呈

「あさひ」百号記念　全号保存者

朝日町では「あさひ」百号発刊を記念して、創刊号から九九号まで全部お持ちの方に記念品を贈ることにいたし、本誌十一月号を通じて募集いたしましたが、その結果次の二氏が全部揃えておいでになりましたので、本誌に公表いたし、記念品を贈ります。

なお役場関係では、教育委員会、図書館、総務課、議会事務局に、個人では竹内広作（総務課）、山本重義（議会事務局）、金田奈々子（民生課）の三氏が全号保存しておられます。

魚津繁次氏（荒川三八八の六、泊中学校教頭、四九才）

広報「あさひ」が内容を充実させながら、ここに第百号を迎えましたことを心からお喜び申しあげます。私は「あさひ」を愛読し、百号まで蒐集したのは、その内容に貴重な資料がのっていたからです。社会科で朝日町の現状や将来について生徒とともに語り合うとき、いつも政治、経済、社会面のよき資料となってくれました。

また創刊当時のった伝説などは私にとって心のふるさとを与え、今にして忘れることができません。

「あさひ」こそ朝日町の発展と将来を暗示するよき歴史書であると思っています。

今後町民の声を反映させるとともに、各種文化財にも関心をよせられ全町民から愛読されるよう祈ってやみません。

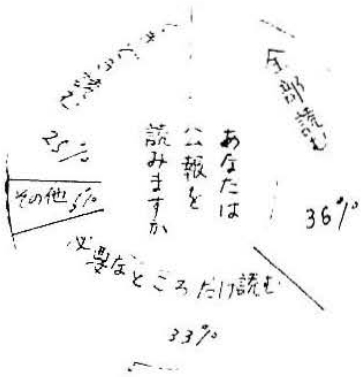
大平与治氏（宮崎一、五三〇、宮崎漁業協同組合参事、五七才）

私が北海道で高等小学校を出ると同時に家業の漁業に従事することになり、当時青年団に入団したころから日記をつけようと心がけ、博物館日記などを求め、記入しましたが、長続きせず、いつも中途で放棄したものです。しかしこれではならぬと昭和五年十月一日数え年二五才のとき、第二回の国勢調査が実施されたのを契機として固い決心のもとに、日記というよりも自分の日々の行動を記録程度に記入することにし、以来約三十三年間続けていますが、記入する記事はメモ程度の簡単なものが多くなりますので、考えついたのは新聞に出た重要と思う記事や、自分たちの身近な関係のある記事を切りぬいて日記帳に張りつけることにしました。そのうちに町村合併が行われ、広報「あさひ」が発行されると、身近な関係記事を後日まで残すのは「あさひ」の保存に限ると思い、ずっと続ってきたわけです。今でもときどき綴りを引っぱり出しては見ていますが、非常に参考になります。

「あさひ」に関するアンケートについて

町民が広報に対しどのような関心をもっているかのアウトラインだけでも知りたいとの念願から、百号を期して、次の図表のようなアンケートを求めたが、回答率は極めて悪く要請数の三十二%に過ぎなかった。従ってこれだけによって、町民の関心の度合を測定することは早計であるが、一応参考になるだろうと思う。

なお回答率の悪いことそのものが関心の度合を明示している、という解釈も成立する。忘れっぽいのか、あわたゞしいのか、めんどうくさいのか、むつかしいのか、相手にしないのか、いずれにしても是非回答が欲しい方面の回答が特に少かったのは残念であった。（調査対象は三十余職種階層男女に亘り約二百名について回答を求めた）。



その他の要望事項

その他	身外者出県躍の活介紹の	こらない肩のせ読物や随筆などを	カット・マンガ・写真を多くせよ	増頁して発行回数を増せ
35%	14%	17.5%	20%	45%

今後に望む

あさひ編集委員長　九里道守

一般町民各位の中で、創刊号から九九号まで全部保存してこられた方が二名おられた。このほかに役場部内にも数名おられる。一部か二部足りないという方はもっとおられるとのこと、こう云ったことから考えていかに「あさひ」が町民の中に深く根をはっているかがうかがえる。

ここで、編集委員会としては、町民各位の要望にこたえて、今一段と内容の充実をはかり、真に親しまれる広報にしたいと念願している。しかし何と云っても予算の裏づけがないことにはどうにもならぬので、お叱りを受けるその第一に、誌面が暗すぎる、活字でうずめつくされて読む気がしないと云うのである。ご意見ごもっとも、相当数の写真を入れて一目で町の動きがわかるようなものにしてゆきたいが、それには、どうしても予算の裏づけがなされなければならない。

幸いに、百号記念特集を出すにあたって、町当局の理解ある快諾を得られた。

昭和三十九年は、新町発足十周年にあたるまことに意義深い年を迎えるので、町当局としてもいろいろ計画もあるやに聞いている。

その前年にあたる十二月号は、広報「あさひ」百号の記念すべき区切りに相当したので、この百号を一転機として、将来の一層の発展のために、町当局始め、町民の皆さまの協力を、切に願うものである。

昭和38年度　朝日町成人者確認照会

この名簿は昭和38年度住民実態調査表により、昭和18年1月16日から昭和19年1月15日までに生まれた、昭和38年度成人該当者を記載したものですが、記載もれしている方は、12月20日までに教育委員会事務局までお知らせください。12月20日までにお知らせのない場合は、成人者名簿に記載できない場合がありますからご了承ください。

大家庄地区

清水宣久　沢田倬郎　松田正明　水田秀雄　高井富貴子　由井一夫　藤田功　由井也　山崎巌　岡田徹　岡田百合子　鍋谷薫　藤井信　広田博　藤田英子　藤田照二　藤田啓明　稲村利子　中島泰子　水野美津子　松島巧　能野男　森田忠子　西島京子　金野義稔　広川一秋　稲垣律亘　渡辺百合子永　広田誼子　藤田量司　前川和章　林田俊子　藤井律子　水田和子　藤田学　木下澄保　河端伸子　柳沢智恵子一　長能勝子　大倉千繁　青木増子　酒井賀子　伊藤

南保地区

谷口昌目　南部三紀雄　宇田淑子　南部保子　長谷真喜子　長谷松子　長谷照子　大森貞子　谷口伊太郎　長林登勝　小林美子　小林正夫　中山秋子　佃山良子　中山美昇　中山也子　道用菊枝　森島美津子　堀地俊雄　田中彰彦　近藤京子　山本節子　北山健雄　竹内礼雄　谷口章二　谷口祐弘　竹内千代乃　谷口蝶要　谷口佳子　谷口昭一　長崎百合子　長崎美津代

野中地区

清水　右井トメ　小川芳男　小川幸江　川瀬幸勇　右井敏恵　小井川子　右井朗子　山岡邦雄　好子

宮崎地区

竹谷祐一　佐田律子　九里年雄　河内敦子　川上喜代一　扇谷正子　岩谷朋音

境地区

未上多津子　根建末誠　根建美松　根建代守　福平耐志　根建靖子　坂林美子　渡辺代昇　水島香子　水島絹子　水島範昭　水島寿子　水島文明　水島尚実　水島朱美　水島正子　前川成均　水島伯子　川島俊子　水口軍治　水島末子　兵庫和雄　前川謙吾　水島十九子　水島模子　高桜昭三郎　水島島昇　水島善仁　水島光洋　水島守代　根島富行　水島克江　岩城行　水島樹　河島村子　水島茂治

五箇庄地区

岡島宗一　金井一光　佐渡正美　広田キミ子　鍛治ひで子　田村容子　金沢清　筒井次　森島龍子　南茂美次　南茂美子　南茂敦子　南茂美敬　南内憲次　河島宏悦　大口恒次　谷井清孝　長田真澄　沢井一雄　永田喜栄子　西井京子　西村吉友　西田ますこ　西村功

笹川地区

米田郁　宮川保　水島定　水島弘子　井上昭雄　前川英男　前川カズ子　波間忠登　中谷久温　津田敏子　深松保子　深松定子　長井弘広　長井英和　寺田カズ子　竹内忠広　竹内久温　竹内仁子　勝田敏子　折谷子　折谷子

山崎地区

本田迪子　角丸美子　愛場久子　大倉照子　道下光子　大井克子　永口久子　九里順一　九里幸夫　七沢桂子　河端麗子　七沢勝正　上不次子　安達信子　水野弥男　谷永友生　秀沢勝子　蓬野美子　水沢和子　蓬野太子　谷沢久門　谷津玲馬　長島淑子　青島俊子　青津槙子　長津金子　白木勝子　竹内悦夫　青島カツエ　長津保子　長津ア雄　間島治子　宮津部枝　崎部秀幸　由美子　宣子

泊地区

広幡　広田策　広田隆守　広幡勝征　吉江美夫　大田ふく利　大脇幹子　新谷孝雄　山田幸英　浜田昭子　岡島法男　茂松司

泊一区

湯島昌昭　飛田洋代　山本巨子　榎島洋子　水島都二　岩城紀子　水島道子　川端勇子　鷹巣経二　久野俊夫　川木寿子　青上小夜子　山口美恵子　殿村君子　九野木節子　井上雅子　藤井英信　藤井敏茂　藤島章　加部子　水島博子　間村由美　西藤輝子　佐藤幸子　酒井紀代江　池田宏文　坂東しず子　島崎昭子　越坂慶子　村上務子　宮成勝三　細川哲夫　萩原美津子　島端勇

泊二区

石黒広美子　金山孝子　上杉みどり　大井正　大蔵剛　大桐整　国谷寛　渡辺子　片守子　大枝寛　大辺子　梅宮了　桑原夫　南保子　魚沢子　菊地寿　島津子　堀内忠　松井雄　寺岡正　寺崎昭　松田子　山田男　松田等　浜崎男　米田久　米田義　米田夫　米田雄　米田昭　寺崎子　岡沢朗　窪田江　犬田男　犬塚子　寺崎治　下沢栄　下沢幸　下沢輝　下沢安　草野節　草崎ケイ　寺崎子　山田洋　松田武　堀内信　島崎寛　菊地志　魚津保　南保沢　梅沢寿　桑守了　国枝夫　渡辺勇　渡辺子　片桐寛　大谷整　大蔵剛

泊三区

浜西裕明　田島昭夫　砂田幸栄　黒坂昭士　黒坂与志郎　勝田紘一　井口末彦　石田弘子　土井征紀　越間政治　魚津崎子　椿中君子　竹田栄子　篠崎侑子　竹中善右ヱ門　越間美智子　岩田藤子　伊藤和子　松原正子　広川静一　野沢妙子　沢崎征人　入江侑子　石原幸子　石崎幹子　山崎美保子　谷保恵子　越美恵子　中忠美夫　中静枝　加島一弘　加島茂昭　芹賀ハツエ　山岡皇子　小崎苗　水杉俊子　平野早苗　横田信義　大橋志津子　稲村哲子　東桂明　愛淑功　平澄子　野崎勉子　縄井征子

泊三区

高橋節子　加藤君子　山口美子　赤川枝子　山崎治子　一藤吉子　伊月宏子　若月芳子　野口朋子　川上茂子　有本早苗　篠田則夫　小泉京子　有賀正治　大宅正明　宝田羊子　島田孝子　辻田花子　山田ケイ子　近藤広子　猪俣由美子　水川光江　田代一三　井林冷節　谷田昌子　浜田恵美子　浜田君子　米田京子　高原トシエ　沼見美好　浅田ミツ　小井むつ子　浅林トメノ　森井靖子　水岡静江　佐島澄子　下藤節子　山田良子　若田初子　藤田みさを　藤田田子　平田田子　平坂敏子　坂淳一